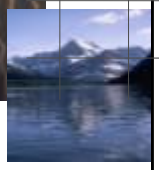


ニュースレターくまもと

NEWS LETTER KUMAMOTO

2020.Summer Vol. 121

■発行：一般財団法人　熊本市国際交流振興事業団

〒860-0806　熊本市中央区花畑町4-18　熊本市国際交流会館

■Publisher: Kumamoto International Foundation

4-18 hanabata-cho , chuouku , kumamoto city , 860-0806

TEL:096-359-2121/ FAX:096-359-5783

e-mail:pj-info@kumamoto-if.or.jp　URL:http://www.kumamoto-if.or.jp/

KUMAMOTO INTERNATIONAL FOUNDATION

熊本市の新型コロナウィルス感染拡大防止要請を受け、当事業団では2月22日から相談業務以外の事業を自粛し、会館利用者の方々へは、催事の中止、延期をお願いしました。5月21日から会館の利用を、事業は6月から徐々に、再開しました。三密を避けるなど制限付きの再開となりますことをご理解、ご協力の程お願いします。

新理事長就任のご挨拶

当事業団は、平成5（１９９３）年に財団法人として設立以来、令和元（２０１９）年の事業年度まで、7名の理事長に引き継がれてきました。

平成２４（２１０２）年に一般財団法人へ移行以来、理事長職を担ってきた吉丸良治（よしまるりょうじ）氏よりバトンリレーがなされ、令和２年６月１６日、小野友道（おの ともみち）が新理事長に着任しました。

コロナ禍でも立ち止まらぬ多文化共生推進　～臨機応変に乗り切ろう！

理事長　小野友道

TOKYO２０２０オリンピック・パラリンピックの延期、熊本では第４回アジア・太平洋水サミットの延期、リーマンショックを超える経済の落ち込み等々、新型コロナウイルスは世界中でパンデミックを引き起こしました。まだまだ影響が続いています。

外国人の方々の不安は、見えないウイルスへの恐怖から生活困窮や訪問者であれば帰国できないストレスへ変化し、５月からは特別定額給付金の手続きに関する問い合わせが急増しました。このような時期だからこそ、それぞれに寄り添いながら、日本人・外国人共に助け合っていける社会をつくっていきたいと存じます。皆様のご支援、ご協力を引き続きどうぞよろしくお願いします。

小野友道　プロフィール

熊本大学名誉教授
熊本保健科学大学名誉教授
熊本県文化協会監事
研究分野：ライフサイエンス/皮膚科学

経歴：
・熊本大学医学部医学科卒業
・熊本大学医学部教授・副学長・名誉教授
・熊本保健科学大学長・名誉教授

出版物：
・「人の魂は皮膚にあるのか」（主婦の友社）
・「いれずみの文化誌」（河出書房新社）
・「肥後の医事ものがたり」（西日本新聞社）等多数

目　次

Contents

新理事長就任のご挨拶　・・・・・・P1

《特集》熊本地震を振り返る
～外国人住民とのまちづくり～　・・・・P2～P4

今年度の事業展開について　・・・・・・P5

ちょっといわせてはいよ！《中国CIR、国際協力推進員の交代について》　・・・・・・P6

世界を知る～It know the world～
青年海外協力隊OB　渡邉　拓人さん　・・・・・・P7

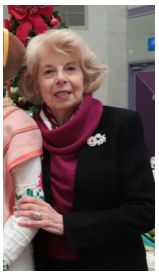
ちょっと日本語/新たな情報発信　・・・・・・P8

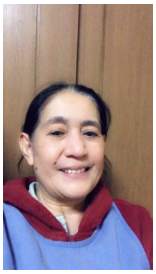
特集　2016熊本地震を振り返る　～外国人住民とのまちづくり～

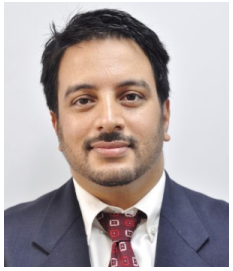
当事業団では熊本地震が起こった4月に、国際交流会館2階ラウンジで熊本地震を振り返るセミナーを開催し、地震（＝災害）と外国人住民をキーワードに多文化共生のまちづくりについて考えてきました。

今年度は、熊本大学がある黒髪地区をモデルとして熊本地震の外国人・日本人被災者の座談会をとおして災害に強い多文化共生のまちづくりについて考える予定でした。そんなセミナー企画も新型コロナウイルス感染拡大防止の為、中止となりました。そこで急遽、留学生をはじめ、外国人コミュニティに呼びかけ、熊本地震体験レポートを募集し、22人の方々の体験談をウェブレポートとしてホームページに掲載しました。

新型コロナウイルスの状況から、本ニュースレターくまもとの紙面上で、「外国人住民とのまちづくり」について考察します。







熊本地震の振り返りについて

今回、寄せられた皆さんの体験を検証し、これからのまちづくりについて考えていきたいと思います。

熊本地震を体験した外国人の皆さんに次の３つのことについて聞きました。

①熊本地震の時に何をしていましたか？どういう行動をとりましたか？

②熊本地震の時に、何が一番困りましたか？

③熊本地震の体験が、その後のあなたの人生に与えたものは何ですか？

それぞれの質問に対する彼らの体験談をいくつか紹介させていただきながら、災害時の外国人支援について、外国人住民を交えたまちづくりについて考えてみたいと思います。尚、お寄せいただいた体験談は全て、国際交流振興事業団のホームページにて掲載しております。

①「熊本地震直後」の様子（体験記抜粋）

★私はグアテマラ出身で、グアテマラは日本と同じような地質の為地震が多い国です。地震は私の人生の一部のようなもので、多くの地震を経験しましたが、それらのどれも熊本で経験したものと比較になりませんでした。

★一番印象に残っていること、それは“ショック”でした。 私は何をすべきか、どこに行くべきか分かりませんでした。

地震直後の研究室の様子

★私は動くこともできず、言葉も出ず、天井を見つめ続け、その後何が起こるかを考えました。私は後で立ち上がってテーブルの下に隠れました。

★最初の大地震が発生したとき、私と妻は大学の研究室から戻った後に夕食を食べていました。その時

突然、私たちは強い揺れを感じました。ボートに乗っていて、ボートが大きな波で揺れるような感じでした。

★私が最初にしたことは、家の中、お風呂、トイレそして、机の下など、身を隠す場所を探したことでした。私は、落ち着こうとし、主人や、子供たちの近くに居ました。私は何度も祈りそして、携帯を自分のそばに置いていました。

★私は最初、これは爆弾の爆発だと思いました。 私はイラク出身なので、これらの音（地震の音）は、イラクでほぼ毎日経験した爆弾の爆発を思い出させました。大変申し訳ないのですが、地震であり、人為的な災害ではないことを知って、少し安心しました。地震の時、机の下に隠れた私の反応は、在イラク日本大使館の日本人スタッフがくれた、 災害に対処するためのいくつかの貴重なアドバイスからでした。

「地震」について学ぶことの必要性

本当に様々な場所でそれぞれが被災された様子が寄せられました。地震（天災）であることで、逆に安心したという意見も寄せられました。ほとんどの人がこれまでに地震を経験していたようですが、今回の地震は規模が大きくかなりの恐怖を感じたことが分かります。その時の行動として何もできずに動けなかった人や、自宅から飛び出した人もいたようです。地震や、地震発生後の行動について学ぶ「防災訓練」、「防災研修」を開催し、外国人住民の方が事前に学ぶことが出来る機会が重要であると感じられました。

②「熊本地震において一番困ったこと」（体験記抜粋）

避難所となった熊大の体育館

★地震の経験で最悪のケースは、英語やその他の言語での情報不足でした。 私は熊本に来たばかりで、情報を得るのがとても大変でした。

★地震が発生したとき、私たちが直面した最悪のケースは情報不足でした。当時、日本語は完全に未知の言語で、私たちは日本語を理解することができませんでした。

★全体的に考えると、避難所に関する情報や、重要な情報は非常に迅速に行政やメディアから発表されていましたが、英語での情報がありませんでした。

★私にとって最悪のことは心配と不確実なことでした。 地震の前に多くの人が熊本に地震はないと言っていたので、なぜこんな大きな地震があったのか理解できませんでした。 地震後、なにをどうしたらいいのかわからなかったので、次に何が起きるのか、どこで食べ物が手に入るのか等不安でした。また、確かな情報がなく、大きな地震が再度発生するなどの噂もたくさんありました。 この様な状況が私を大変不安な気持ちにさせました。

★一番大変だったことは、避難所のほぼ全部の情報が漢字で書かれていたことそして、私は日本語があまりできなかったので、その情報に何が書かれてあるのか理解できなかった。ＳＮＳには多すぎるくらいの不正確な情報が流れていたものの、その当時、正しい情報を判別するのがすごく難しかった。

★一番困ったことは自分が理解できる情報を入手することです。外国人が分かりにくい言葉がいっぱいあって、放送用語でも、掲示するものでも、外国人にとってやさしくない部分が多いです。(特に日本語の丁寧な言い方、曖昧な言い方は誤解しやすいと思います）

「多言語での情報発信と、その後の行動」

今回のレポートでは半数の人から災害支援情報が理解できなかったとの声が寄せられました。この他にも、水や食べ物をもらうのに苦労したとの声も聞かれましたが、これらの問題についても避難所や、給水、配給に関する情報がうまく伝われば解決できる問題だと思われます。震災直後は日本人である私たちも十分な情報が入手できるかどうか難しいところもありますが、そこに、（外国人住民にとっては外国語である）日本語の情報だけでは十分に伝わっていかないということを実感しました。また、災害の状況についての情報だけでなく、それに対して、どの様な行動をとるべきかを伝えることにより、情報とともに安心を届けることになるということも見えてきました。

被災地でボランティア活動

③「熊本地震がその後に与えた影響」（体験記抜粋）

★私はボランティアや地震避難の経験を沢山しました。ご存知の通り、インドネシアは日本と同じく地震が多い国です。2016年の熊本地震でのリアル体験やボランティアトレーニングから私はインドネシアでこれらの経験を共有することができ、ボランティアトレーニングを行っています。

★私にとって今回の地震の体験は、大変幸運だったとも言えます。なぜなら地震の時、日本人がどのように対応するかを学ぶことができました。特に災害

時にどのように助け合うかを学びました。

★熊本地震以来、私は災害に備えて常に食糧を備蓄しています。

★今回のCOVID-19の危機に対しても、熊本地震で学んだ決してパニックにならないということを教訓にして乗り越えることができました。インドネシアでの地震に対しても、今後は準備をしておきたいと思います。

石垣が崩れた熊本城

★私がこれまでになく確信していること、それは平和と快適さを保証できる唯一の方法は、ローカル（地域）とグローバル（世界）の両方での連帯とコミュニティを通じていることだと思います。

★今回、熊本地震を体験したことで、今後の私の人生の中で同じような体験をした場合、どの様に行動すべきか（テーブルの下に隠れたり、広場に避難するなど）を学ぶことができました。

★この大地震を経験した後、次のことを心がけています。

a）パスポート、在留カード、学生証、お金などを入れた非常持ち出し用バッグを用意しました。

b)自分たちのアパートの近くにある避難所を探し、自分たちで避難できる様に準備しています。

c）英語を上手に話すことができる日本人の友人、または英語ができる同僚の電話番号を持つこと。

d）少なくとも簡単な、基本的なコミュニケーションができるよう日本語を学ぶことです。

★地震以来、私は2つの異なる都市（神奈川県と千葉県）に住みました。そこで最初にやったことは、最も近い避難場所（避難所）の場所を確認することです。また、緊急時に必要な食糧と水を確保することでした。

「今後の災害への備え・教訓」

熊本地震の体験は今後の災害に対する教訓となり、様々な備えを実行されています。次のような9つの項目がありました。

1、備え（食料、防災用品、現金）　11人

2、防災訓練（避難所の確認）に参加する　9人

3、近所とのつながりを作る　8人

4、困難に立ち向かう姿勢を学んだ　3人

5、災害時の行動を学んだ　2人

6、困難である人の存在を知り、みんなが安全に暮らせるように努力すること　2人

7、しっかりした家を選ぶ　2人

8、日本語を学ぶ　1人

9、通話機能がある携帯電話を持つ　1人

「外国人住民との共生のまちづくり」にむけて

今回の３つの質問に対する皆さんの回答から、「災害に強いまちづくり」について以下の３つの必要性が見えてきました。

1、災害発生時に取るべき行動について日頃から学ぶこと

2、災害情報について、タイムリーな情報を多言語で伝えるだけでなく、その後の行動についての情報提供すること

3、災害への備え、近所の人たちとの繋がりを作ること

これらに対して事業団としては、

外国人住民の防災訓練

1、防災訓練とともに、昨年度より作成した防災カードを利用して災害に対する情報と知識を深めていく研修会の開催します。

2、災害時多言語外国人支援システム「K-SAFE」で災害メールを、英語、中国語、韓国語とやさしいにほんごで情報発信する際、状況情報だけでなく、その後の行動についての情報を発信していきます。

多言語防災カード

3、「災害時外国人支援多言語サポーター」養成講座の育成を継続し、災害時に避難所に避難した外国人住民の方々が孤立しないよう、避難先での外国人に関する情報を事業団に提供してもらい、一方で、彼らに対して、災害情報を届けられるような制度を構築しています。また、地域で実施される防災訓練に対して、外国人住民が積極的に参加し、地域住民間の関係作りに尽力していきたいと思います。

このように、様々な防災に関する事業を展開しながら外国人住民の皆さんに対して、様々な形で災害に関する情報を提供するだけでなく、近隣住民との人たちとの関係作りを構築しながら災害に強い多文化共生のまちづくりを作っていこうと思います。

国際交流会館グローバルカレッジ（語学講座、外国文化、インターナショナルカフェ）について

コロナの影響を受け、これまで当たり前のように行ってきた対面での講座が中止を余儀なくされました。後期から各講座を再開していく中で、熊本県からの感染防止対策チェックリストに則って、大きな会議室の使用や、換気、マスク着用のお願いなど、可能な限りの手段を取りながら、少しでも安心して受講頂ける教室運営を目指していきます。

実施予定の講座は、7言語20クラスからなる語学講座や発声方法、文学作品の中の美しい表現を味わう「美しい日本語講座」、人間関係や生き方などを学ぶ「目からうろこの論語講座」などです。また、先の号でも紹介しました「第4回　アジア・太平洋水サミット」の開催は来年に延期されましたが、「英語でボランティアガイド養成講座」につきましては、「熊本の水」をテーマに9月からの開講を予定しています。

他、市民の皆さんに気軽にご参加頂ける「インターナショナルカフェ」は、コーヒーを飲みながら、外国の言葉・文化・歴史・習慣・観光や国際交流・国際協力などについて学んだり、市内に住んでいる外国人との交流や国際経験豊かな経験者たちと気軽におしゃべりできる機会です。前述の講座と併せて、ご参加いただければ幸いです。

これからの時代は、インターネットを使ったオンラインでの催し物が主流になっていくことは間違いありませんが、直接的に五感に訴えることのできる、対面での交流機会のすばらしさも忘れることがないよう、十分な対策を講じた上で、人と人とを繋げていく取り組みを継続していきたいと思っています。

分類	国名	期日	時間	参加費
異文化カフェ	フランス	第１火曜日	18:30～19:30	500円（コーヒーか紅茶のワンドリンク付き）
	イタリア	第１金曜日	18:30～19:30	
	スペイン	第２火曜日	18:30～19:30	
	アメリカ	第2木曜日	14:00～15:00 18:30～19:30	
	韓国	第3月曜日	14:00～15:00 18:30～19:30	
	中国	第3金曜日	14:00～15:00	
	ドイツ	第4木曜日	14:00～15:00 18:30～19:30	
CIR（国際交流員）カフェ		第３木曜日	14:00～16:00	
キッズカフェ		第２土曜日	10:00～11:30	無料
コラボカフェ		第４土曜日	14:00～15:00	

日本語学習活動について

熊本市内の5つの地域日本語教室、初級講座、JLPT学習教室など、全ての日本語教育支援事業についても、２月の最終週より休止となりました。毎週、外国人住民約150名、日本語支援ボランティア約130名の方にご参加いただいていた教室が、突然休講となってしまい、大変寂しい状況でした。参加者のみなさんが楽しみにされていた毎年恒例のお花見会も、今年は開催できませんでした。2016年の熊本地震では、避難所運営の対応などのため1か月ほど開催できない期間がありましたが、これほど長期間の休止は初めての事態であり、再開の時期が見えないことが大きな不安でした。その間も、多くの学習者とボランティアの方から再開を待ち望む声をいただき、日本語教室が外国人住民・日本人住民ともに地域のよりどころとなっていたのだと強く実感し、コロナの状況をみながら安心して再開できる方法を模索してきました。

熊本地震後に開設したfacebookページや公式LINEなどのSNSはコロナ禍でも大変有効で、参加者のみなさんと気軽に連絡をとったり、情報交換したりすることができました。直接会うことができなくても、「すぐに連絡をとれる」「いつでも相談できる」という環境を整え、身近なつながりを感じられることが大事だと考えています。

今後、日本語教室は、各会場のガイドラインに沿って活動形式を変え、6月下旬より順次再開していく予定です。ご家庭やお仕事の都合で、まだ活動できない方もいらっしゃいますが、これからも参加者のみなさんとのつながりを大切に、新たにICTを活用したオンラインでの活動にも、取り組んでいきたいと思います。

※グロカレ・日本語学習活動につきましては、様々な条件で開催の日時や内容が変更となる場合があります。参加を希望される方は、事前に問い合わせいただきますようお願いします。

グロカレ・日本語学習活動へのお問い合わせ先

熊本市国際交流振興事業団　企画チーム

TEL：096-359-2121
E-mail：pj-info@kumamoto-if.or.jp
受付時間：午前9時～午後8時
休 館 日：毎月第2、第４月曜日、
年末年始（12月29日～１月3日）

元気でね

こんにちは。元CIRの王鶴凌（おう　かくりょう）です。私は、2016年から2020年にかけて、　熊本市役所国際課に所属し、国際交流員として、楽しい4年間を過ごしました。

来熊のきっかけは、１回目のJET経験です。2008年4月に、鹿児島県薩摩川内市に派遣され、人生初の渡航を経験しました。その後、２年間のJETプログラム活動を終えて一旦は帰国しましたが、ぜひ恩返しをしたいという気持ちが強くなり、2013年に再び応募の資格を持つと、JETプログラムへの応募を再開し、４回目のトライでやっと成功しました。それが、同じ九州の熊本でした。熊本は2015年の秋に、個人旅行で熊本城を見学したことがありましたが、まさか2016年から住むことになり、さらに熊本に赴任した直後にあんな大きな地震を体験するなんて思いもしなかったのです。

出身地の四川省は、中国でも地震が一番多い地域で、来熊する前に、地震を何回も経験しましたが、外国で地震を経験したのは、初めてです。震災後の対応や、行政からの補助などに関して、中国とだいぶ違うことがわかりました。

同じ国際交流員としても、鹿児島と比べて熊本での仕事内容はもっと多種多様で、困難を感じると同時に達成感も満喫していました。市役所では通訳・翻訳の量が多くて、国際交流会館で毎月子供と遊ぶサロンがあって、手が不器用な私にとって、工作とゲームがかなり大きな挑戦でした。

熊本の透き通った青空、親切な人たち、桜満開の熊本城、緑豊かな阿蘇山、美味しいトマト・・・すべて忘れられません。心を込めて、「ありがとう！」と言いたいのです。さようなら、またいつか元気で会いましょう。　**前中国CIR　王鶴凌**

2020年5月末を持ちまして熊本県国際協力推進員を卒業した赤星亜朱香（あかほしあすか）です。2018年10月から１年８ヶ月と短い間でしたが、多くの方との出会いやご協力のおかげで、楽しく充実した時間を過ごすことができました。

ボラキャンで国際協力について説明

熊本市国際交流振興事業団さまとも「世界のキョリを縮めよう！」「世界を旅するカフェ」「国際ボランティアワークキャンプ」などたくさんの事業でコラボレーションさせていただきました。また、JICA事業として「国際協力出前講座」等では、県内各地の学校でJICA海外協力隊の体験談講話や国際理解ワークショップを実施させていただきました。これらの事業を通して、熊本県内外の国際協力に興味を持っている方々と出会えたことは国際協力推進業務の励みとなっただけでなく、今後の自分自身のキャリア、特に国際協力との関わり方について考える機会にもなりました。任期終盤は、新型コロナ感染症拡大の影響で、計画していたイベントなどを実施することができずもどかしい思いもしましたが、逆境も貴重な経験と考え今後の糧にしていきたいと考えています。

在任中に出会うことができたたくさんの方々に心から感謝を申し上げますとともに、みなさまのご健勝とご多幸をお祈りしています。また、いつか世界のどこかでお会いできることを楽しみにしています。　**前熊本県国際協力推進員　赤星亜朱香**

はじめまして

5月よりJICAデスク熊本 国際協力推進員となりました、尾上香織（おのうえかおり）です。私は生まれも育ちも熊本で、ロンドンや福岡、トンガと渡り歩きましたが、またこうして大好きな熊本へ舞い戻ってきました。小学生の頃から所属していた熊本ユースシンフォニーオーケストラで、2012年よりボランティア指導者となり、その経験を活かして青年海外協力隊（以下協力隊）に参加したいと一念発起。5年間勤めた特別民間法人を退職して、2017年7月から2年半、南太平洋にある小さな島国トンガで音楽隊員として活動しました。

私の配属先は、トンガの首都ヌクアロファにあるトゥポウ高等専門学校の音楽科。18歳以上約25名の学生たちへ弦楽器を中心とした音楽の指導を行いました。トンガは敬虔なキリスト教国家で、合唱でのハモりや金管楽器の演奏はお手の物。そんな音楽が生活の一部であるトンガで、私が来た意味って一体何？と自問自答することもありましたが、弦楽器に関してはまだまだ未開の地。弦楽器を広めたい、という同僚の熱い思いに、私自らのヴァイオリンの音色を聴いてもらうことも、弦楽器普及に繋がると気を取り直し、特にトンガ人にとって欠かせない葬儀演奏にも数多く参加。トンガ人にとって音楽がいかに大切で神聖なものかということを知り、音楽隊員としてトンガに赴任できたことに大変感謝しています。

昨夏にはそんな同僚や学生らと総勢16名で日本演奏旅行を実現。熊本ユースシンフォニーオーケストラ定期演奏会出演や、ここ熊本市国際交流会館（以下会館）などでトンガ音楽のパフォーマンスを行い、ご好評いただきました。ラグビーワールドカップにて熊本でも試合をしたトンガの知名度を、少しでも上げられたかなと自負しています。同時に、音楽は世界共通語だということを再認識しました。

昨夏の演奏旅行にて

（前列向かって左から3人目）

実は、会館でフェアトレードに携わっていた大学生時代、偶然「ブータンでヴァイオリン指導」を行う協力隊の要請内容を発見したことが、その後私が協力隊に参加する大きなきっかけとなりました。今回また縁あって、会館でお仕事できることを大変うれしく思います。地元熊本と世界を繋ぐ窓口として、ここ熊本にいながらできる国際協力の形も含めて、みなさんと一緒に考えていければと思っています。ぜひお気軽に、会館2階JICAデスク熊本へお越しください！

国際協力推進員　尾上香織

世界を知る
～It know the world～

このページでは、「世界を知る」をテーマに独立行政法人国際協力機構(JICA)デスク熊本や、国際交流・協力分野で活躍している皆さんのご協力を得て、日本で生活する私たちには日常知ることができない興味深い世界の状況を紹介します。

「マラウイにて」

青年海外協力隊　2017年度2次隊　渡邉　拓人（わたなべ　たくと）さん
（2017年10月～2019年10月　マラウイ派遣　職種：行政サービス）

アフリカ南東部に位置するマラウイ共和国。ほとんどの人が聞いたことも無い国だと思います。国民の多くは農業で生計を立てており世界最貧国の一つとも言われている国です。

首都リロングェから約５０キロの場所に私の任地であったドーワ県があります。自宅から数キロ先にはザレカ難民キャンプがある事でも知られている地域です。私は青年海外協力隊としてドーワ県立病院で活動を行ってきました。私の配属先であるこの病院は、県の総合病院としての役目を担っており22ヵ所のヘルスセンター（診療所）を管轄しています。

職場での同僚と

マラウイ国内にあるほとんどの病院では充分な医療環境が整っているとは言えず、この総合病院においても例外ではありません。廊下の屋根は落ちかけ、窓ガラスは割れたまま、院内至る所に老朽化が目立ち、修復される様子もありません。そのような環境だからこそ、限られた予算・人員の中で、より良い医療サービスを提供するために５S（整理、整頓、清掃、清潔、躾）と呼ばれる活動を行って参りました。日本社会の中では当たり前のようにも思われる整理整頓を始め、医療従事者であれは基礎的な感染予防、または患者に対する対応についても多くの課題を目の当たりにする現場でした。一番の問題点は現地スタッフが業務効率向上に対する利点を感じられない事からのモティベーションの低さです。自分の仕事以外の事は「する必要のない事」と考える事から多くの診察室や倉庫が散らかっており、本当にここは医療現場なのかと思う日々でした。簡単な整理整頓の必要性を伝えるだけでも悪戦苦闘し成果を上げられない時期もありましたが、病棟対抗で競わせるイベントを開催するなど、多くの人の支えのおかげでスタッフの意識は確実に変わっていきました。

配属先での説明の様子

今となり振り返ってみると上手くいった事とそうでなかった事、その全てがスタッフの心を動かすきっかけになったのではないかと思います。活動を進める中で私とスタッフ間の距離は縮まり、時にはスタッフによって励まされるような場面も数多くありました。

配属先の仲間たち

マラウイは「The Warm Heart of Africa」と呼ばれるように、マラウイ人は温かい心の持ち主としても知られています。私が派遣前に描いていたアフリカに対するイメージや、異国で生活する事は大変だろうといった予想は大きく覆されました。マラウイの人々の笑顔を見る事で自然と私は幸せな気持ちになり素晴らしい２年間を過ごす事ができたと心から感じています。私の第二の故郷とも呼べるこのマラウイをこれからも応援していきたいと思います。

JICAデスク熊本について

JICA海外協力隊（青年海外協力隊、シニア海外協力隊）や国際協力に興味がある方はJICAデスク熊本までお問い合わせ下さい
熊本市国際交流会館2階
午前9時～午後6時（日曜、月曜休み）
TEL：096-359- 2130
E-mail：jica-desk.kumamotoshi@jica.go.jp

ちょっと日本語 Japanese Tip

NPO法人日本語サポートあさ
代表　小川　ひろみ さん

「日本語ができる」とは

ずいぶん前から、私たちの周りに「日本語ができる」世界中の国からの人たちがふえてきました。では日本語ができるとは、そして日本語能力レベルを初級とか中級、上級とかいうことがありますが、何を基準としているでしょう。また、日本語を教えてほしいと言われたら、何を目標に教えればいいでしょうか。

様々な分野で日本語学習者が増える中、2010年以降、コミュニケーションを視点とした評価へと基準が変わっています。つまり、それまでは語彙、文法、漢字や学習時間で分けていたのが、「何ができるか」という視点へと変わりました。初級とは「身近で日常的なことが日本語で表現できる」中級とは「問題解決したり、やや複雑な内容が扱える」上級とは「ほとんどのことが公的な場面を含めて論理的に処理できる」などです。文法や語彙だけでなく、聞き返しや相槌などの人と人とのやり取りもかかわっています。これは日本語を教えるうえでも大切な指針ですから、これがわかっていれば何をどう教えるかが見えてきます。また、これは日本語だけでなく、全ての言語に共通することですから、ご自分の外国語能力をこの視点でレベル判定してみませんか 。

新しい情報発信方法として

当事業団では、様々な情報を発信していますが、この度、ホームページを刷新することにしました。事業団に加え、国際交流会館と熊本市外国人総合相談プラザの３つに分かれ、各関連情報が見つけやすくなりました。

合わせてfacebookでの情報発信にも力を入れており、こちらは「熊本市国際交流会館」だけでなく、「熊本市外国人総合相談プラザ」、「くらしのにほんごくらぶ」、そして「熊本市国際交流会館　link cafe」のアカウントを設けました。

新型コロナウィルス感染症拡大防止の為、対面での対応の機会が制限されつつあります。しかし、この機会にSNSを通じて多くの人とつながり、熊本の国際交流に有益な情報を発信していきますので、それぞれのfacebookで皆さんの「いいね！」をお願いします。

熊本市国際交流会館　　熊本市外国人総合相談プラザ　　熊本市国際交流会館 linkcafe　　くらしのにほんごくらぶ

☆2020（令和2）年度賛助会員募集中！☆

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団では賛助会員を募集しています。当事業団の活動にご理解とご支援をいただくと共に、さらなる国際交流や国際協力の輪が広がることを願っています。

①個人会員　　一口　　2,000円/年(一口以上)　②団体会員　　一口　　10,000円/年(一口以上)

熊本市国際交流会館　国際交流サポートセンター

開館時間　午前9時～午後8時
多文化共生オフィス　TEL:096-359-2121（直通）
休館日　第2・第4月曜日、年末年始（12月29日～1月3日）

Civic Support Center for International Exchange and Cooperation
Kumamoto City International Center
Service Hours 9:00a.m.-8:00p.m.
Multicultural affairs office　Phone:096-359-2121(Dial-in)
Closed: 2nd and 4th Mondays of each month, Dec. 29th-Jan. 3rd